四季報 No.65

鴨東通信

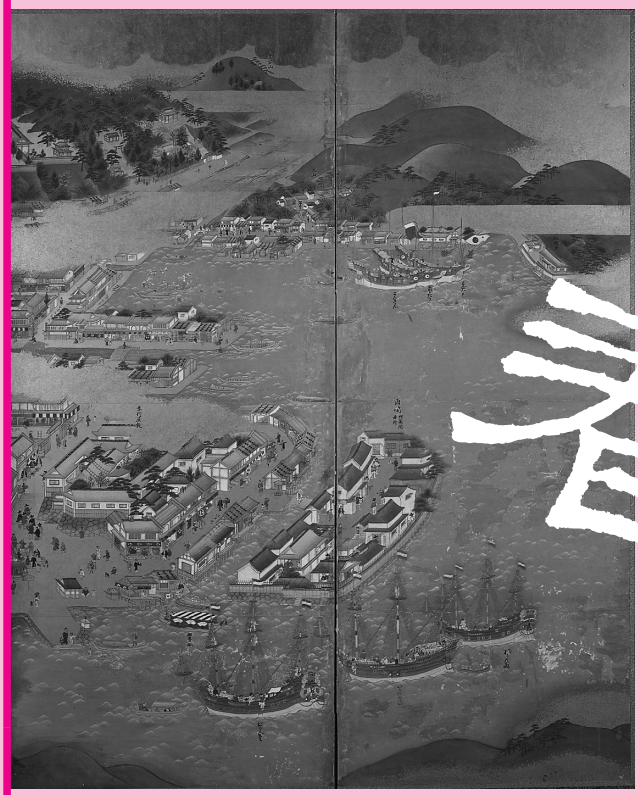
おうとうつうしん

2007.4

てぃーたいむ
産業技術に文化の視点を
後藤邦夫・中岡哲郎・廣田義人

特別寄稿
「経済史文献解題」紙版終了と
データベース化・国際化　本多三郎

史料探訪㉘
奈良絵本・絵巻の叢書　石川　透



春

■私のノートから■
山中裕編『御堂関白記全註釈』と私　近藤好和

■人文科学の最前線■
立命館大学21世紀COEプログラム　金子貴昭

◉新刊案内◉
日本産業技術史事典
布がつくる社会関係
御堂関白記全註釈 寛弘8年
八瀬童子
夏目漱石における東と西
中国銅銭の世界
日本古典随筆の研究と資料
長崎奉行の研究
日中戦争についての歴史的考察
丹後地域史へのいざない

思文閣出版

産業技術に文化の視点を

後藤邦夫（桃山学院大学名誉教授）
中岡哲郎（大阪市立大学名誉教授）
司会：廣田義人（大阪工業大学准教授）

■産業技術史博物館構想■

廣田：日本産業技術史学会で、永年進めてきました日本産業技術史事典がこのたびようやく刊行の運びとなりました。そもそもどういうきっかけでこの事典の出版は企画されたのですか。

後藤：日本産業技術史学会が発足したのは昭和59年（1984）です。当時の学会は、梅棹忠夫先生が提唱した「国立産業技術史博物館」の実現を目指していました。吉田光邦先生が初代会長として博物館開設のための調査研究活動をリードしてきたのですが、吉田先生は同時に、日本の産業技術史を俯瞰する『日本産業技術史事典』の刊行を構想されていました。それが果たせぬまま吉田先生は91年にお亡くなりになりました。その後、学会自体の老齢化も進んできましたし、また産業技術史博物館の仕事もなかなかうまくいかないということで、学会が先細りになっていく心配がありました。2000年頃になって、4年後の学会創立20周年を迎えるために、求心力をたもち、いろいろな人が執筆を通じて学会に関心を持っていただけたらいいなということで、かなり無理を承知で、20周年記念企画として事典刊行の提案をいたしました。

廣田：初代の学会の会長をされていました吉田光邦先生が、最初に考えられたということなのですけども、その後学会の会長は中岡先生に引き継がれました。中岡先生は、吉田先生から事典の構想をお聞きになられたのですか。

中岡：僕は吉田先生から直接事典の構想を聞いたことはないのです。吉田先生からは産業技術史博物館の建設運動を手伝って欲しいということを言われて、もっぱら最初は博物館運動で走り回っていました。事典の構想の話は聞いていなかったし、後藤さんから話が出た時に、僕はどちらかというと今の学会でそんな大きな企画はできるはずがないという意見だったのです。あまり乗り気でなかったのだけども、後藤さんがあまりに熱心だから（笑）、引きずられて参加して、だんだんと入れ込んできたということです。学会に所属していない研究者や、一度は定年で学会を辞めると言っていた人がまた関係してくれたというようなこともあって、学会の力量以上のものが最後はできたと思いますね。やってよかったと今は思っています。

中岡氏

■読む事典■

廣田：小項目の数が344項目、執筆者の方は120名、そのうち学会員以外の方が80名近くになり、学会外からかなり協力していただきました。また、大項目を最初にたて、そのなかで小項目について記述していくというのが、本書の大きな特徴ですね。

後藤：編集委員会で議論して、この構成になったのです。最初は産業技術史博物館との関係をかなり意識しました。産業技術史は、コンテンツがはっきりしているようでしていません。展示できる物はあるのだが、ただ物だけを並べてもしょうがない。どういう見出しで並んでどういう研究がバックにあるかということがもう少し見えていないと、説得力が薄いということをかねがね思っておりました。事典であると同時に将来の博物館設立のコンテンツとして役に立つものを作りたかったのです。もう一つは、読む事典にしたくて大項目主義をとりました。

中岡：いろいろな議論をした末に、大項目の下に小項目をぶらさげるという形になりました。歴史というのはトータルなものであって、ダイナミックに相互に関連しあっています。関連分野の流れの中で小項目が論じられているという方が、歴史の大きな流れが見えてくる。つまり、読み物として読めるということですね。知りたいことについては小項目を読めばだいたいわかるし、もう一つは大項目を読んだ後で自分の印象に従って索引を使って言葉を拾っていけば読めるという、両方の読み方ができることがこの事典の魅力であると思います。

廣田：大項目の選定についてはかなり苦労しました

ね。
後藤：『明治工業史』から始まって、日本の産業史についての文献を、手に入るものはほぼすべて見て、どういう項目になっているか調べました。それが大変困ったことに、古い時代には重要でも、今は廃れていった分野がありますね。反対に、昔なくて今あるものもあります。歴史の事典だから、なければ困りますし、また記述のウェイトをどうつけるか、どう並べるか、悩ましいですよね。

■生活に即した産業技術史■

中岡：大項目選定の過程でかなり議論になったことの一つは、山口昌伴さんが執筆された「道具」という項目ですよね。日本の庶民生活の中で、道具として使われているものを通して、技術と生活史の広がりを捉える、そういう事典を山口さんは作りたかった。産業という言葉にわれわれは強く惹かれていた。もう少し産業の流れに即した事典を作りたいということで、かなり長い議論があったのです。だけど最終的には山口さんの考え方も尊重して、総説の次の二番目の大項目に道具を配置しました。大項目の中の小項目の選定・構成についても、大項目の執筆者の個性を尊重して、執筆者に任せるという方法にしました。
後藤：産業という分野は、殖産興業という形で国の役割が非常に大きくて、そういうタイプで日本産業技術史を書く本はいくらでもある。具体的に人々が何をやったか、生活に近いところを重視して技術史を書くというのはなかなか難しい。今回も成功しているとは言い難いですが、ややそちらの方に光を当てる事典になったかなという気がします。国やゼネコンが主になってやるような都市計画や軍事技術も大項目からは省き、必要な技術は他の大分類の小項目の中に分散して配置してあります。ある意味では欠陥ですが、あえて落としたことで少し変わった日本の近代を示せたのではないかと思います。

■80年代以降の流れ■

廣田：対象の時代としては幕末から1980年までですね。これは日本の近代工業の成立過程を見るということですね。
後藤：そうです。欧米へのキャッチアップ形の技術史についてはかなりうまく描けたのではないかと思っています。このキャッチアップ形の技術は、70年代から行き詰まってきたのですが、バブル時代までは何とかそれでいけた。80年代になるとそうではなくなってきた。歴史の方で言うパラダイムが変わったのです。
中岡：事典の最後に、「1980年代以降の産業技術」ということで、総説のみの大項目を後藤さんに書いていただきました。このまとめには感心しました。70年代80年代以後の発展をあれほどきれいに分析した文章は初めて読みました。

後藤氏

後藤：80年代までは1億総中流時代でした。既にあるものをいかにしてたくさん作っていくかが問題でした。ところが90年代になると所得の構造が変わってくるのです。年収の世帯別分布のグラフが右下りのM形になっていて、年収1200万円くらいのところに一つの山があり、4～500万円くらいのところに大きな山ができている。中流つまり所得の平均値の層は人数が少ないという奇妙なことになっています。2000年ぐらいから、儲かっている会社は高所得の層を対象にした高品質・高価格・高収益製品を扱っていきます。中流を狙っているところは後退していきました。これは世界的な現象です。一般的にイノベーションが起こっていると言われている時は、高所得者を対象にした製品が市場をリードしていって、次第に成熟して中・低所得層に広がっていくと言われています。日本はそれまで、初期段階の高品質・高価格なものを金持ちのために生産するということはあまりやらないできました。この流れがうまく波及して社会全体が富むか、分かれたままになるかというのは、今はわからない。将来、事典の改訂版が出る頃には見通しがついてるのではないかと思います。
中岡：明治維新から第一次世界大戦までは、在来産業がヨーロッパ技術に反応して起こった発展です。二つの発展が相互に補完しながら発展してきました。それが、第一次大戦のあたりから、矛盾をはらみながら片一方では軍事にすごく傾斜していきます。日本が負けたのは軍事的に負けたというのもあるし、産業としては無理が極限までいって持たなくなったという側面もあります。それが一挙に崩れたところから敗戦後出直すことによって、重化学工業化という発展が始まりました。エレクトロニクス技術は戦時研究が戦後の発展の基礎を作りました。素地があったところに技術導入が大量に可能になり発展したのです。そういうタイプの発展が80年代まで続き、その後バブルでがたんと来る。その時期に世界経済そのものはもうちょっと新しい段階に入っていた。そこは後藤さんの分析で非常にきれいに書けています。事典の主な部分、土と石などや食品工業・道具、そういうものを含めて第一次大戦ごろま

廣田氏

での発展も、ああなるほどというふうに捉えられるようになっています。戦後までかなり全体がうまく捉えられて、最後の後藤さんの記述が入っている。大項目を通して読んでいくと、日本近代技術史になっています。あまり仲間ボメをしていてもしょうがないけど（笑）、当初心配していたよりはいいものができたと思っています。

■文化との関わり■

後藤：今回よくわかったのは、研究者の研究分野に非常に偏りがあるということですね。一人にたくさんの項目を書いてもらったところもありました。研究者の分布と産業技術の分布とがどれくらいうまく合致しているかというのが問題で、研究者自身がもう少し増えて、いろいろな分野を研究してもらわないと将来不安な気がします。鉄とか繊維・機械という分野は伝統的にたくさん研究者がいるし、食品などは一人の人にほとんどお願いすることになってしまいました。研究者の育成のためには、本当は研究機構を持った博物館が必要なのでしょうが、現状ではそういうわけにもいかない。それから日本の大学のシステムそのものの問題として、技術史や科学史という講座が作りにくい。若手の研究者を引きつけるにはどうすればいいかというのは難問です。

廣田：私は大学の知的財産学部という名称の学部で技術史を教えていますが、歴史に対する学生の意識は必ずしも高くないですね。なぜ過去のことを勉強しなければならないのだという感じです。

中岡：欧米では割合古くから、技術史を教えなければならないという、技術者の一種の倫理みたいなものがあります。日本と違うところですね。日本の工学部の先生の考え方を象徴する話ですが、私が大学教員をしていた時に、工学部のある先生と会話をしていたら「うちに箸にも棒にもかからない助手がいて苦労している。技術史やらしたらどうだろう、先生預かってもらえませんか」と言うのです（笑）。

後藤：学問の序列が違うんですよね。日本では医学部・工学部が偉いのです。後発国の一つのタイプで、殖産興業・近代化のために技術主導で学問が形成されてきました。

中岡：イギリスでは、ギリシャ以来のメカニカルアーツ（工芸：ギリシャでは奴隷のわざとされた）への軽蔑の伝統がケンブリッジなどにはありますよね。今でこそ、マイクロソフトタウンと言われるくらい、マイクロソフトなどに財政的に乗っかっていますが、ケンブリッジ大学に工学部ができる際には大分すったもんだしました。私の友人がケンブリッジ大学工学部にいましたが、何かというとメカニカルアーツを一段と低いものに見る風潮があって、本当にいやだとよくこぼしていました。その後彼は別の大学に転出し、私が「ほっとしただろう」と聞いたら「ここはあまりに文化の水準が低い。クイーンズカレッジが懐かしい」とぼやいていましたが（笑）。

後藤：私が留学していたテキサス大学では、５万人の学生のうち１万数千人がリベラルアーツ（自由学芸：中世大学の基礎教養科目である文法・修辞学・論理学・代数・幾何・天文・音楽）の系譜を引く人文学部でした。教員の給料はロースクールが一番高く、それからビジネススクールというふうに下がっていって、最低がリベラルアーツです。逆に給料は低いが、学問の序列が一番高いのがリベラルアーツでした。日本は理工系の理学部と工学部の規模は、２対８ぐらいの割合で工学部が大きいですね。そのことをどう捉えるかは難しいです。だからこそ日本は「ものづくり」がすごいという人もいるわけなので。

中岡：技術とは、常に何か与えられた目的を達成させるための手順みたいなものです。ホームランを打つ技術から遺伝子操作の技術にいたるまで、決まった手順があって、その手順がわかっているがなぜそうなるかわからなくても、目的に到達できるならそれでいいわけです。試行錯誤しているうちにその間にあるものがどんどんわかっていくと、それをどう組み合わせるかということになります。遺伝子の構造がだんだんわかってくると、どういう遺伝子が何を司っているかがわかってくる。わかってくるとそれを応用して人間のクローンを作ろうと考えるようになるわけです。やっていくとせっかく作ったクローンがすぐ死んでしまったりして、それはなぜかと考えていくとまたいろいろなことがわかってくるわけです。この、わかってくるということはもう止められない。いわば人間の“業”みたいなものです。だからこそ社会的文化的観点から技術をコントロールするという思想がなければ非常に危ないですね。

後藤：文化との関わりを見ることが重要です。産業技術の今後を考えるにあたっても、まず歴史・文化を知ることから始めるしかないわけです。世間では、科学技術分野の強化が叫ばれていますが、哲学や歴史学の分野で国際競争力を高めないと、理工学も一国の文化に根ざした発展には至らないでしょう。産業技術についても文化との関わりをもっと重要視するべきです。　（2007.3.5　於：思文閣出版）

日本産業技術史学会創立20周年・思文閣創立70周年記念企画

日本産業技術史事典

日本産業技術史学会編

◆編集委員（順不同）◆

中岡哲郎・後藤邦夫・山口昌伴・三宅宏司
鈴木　淳・沢井　実・堀尾尚志・麓　和善
田中一郎・高松　亨・石村真一・内田星美

▶B5判・550頁／定価12,600円（税5%込）

ISBN978-4-7842-1345-0

2007年5月刊行

＊明治維新以降、めざましい発展を遂げてきた近代化の歩みを支えた産業技術史の変遷を跡づけ、日本の産業技術史を俯瞰する

＊「日本の近代」の理解において不可欠でありながら、従来必ずしも系統的・組織的に実施されてこなかった日本の産業技術史研究を23の大項目に分け、関連項目を344の小項目としてとりあげた

＊近代化以前からの「草の根」における技術と技能の蓄積に対し光を当て、民間の「現場」の力を重視

組見本（70%縮小）

大項目の総説で歴史の流れを確認できる「読む事典」

あり、スーパーヘテロダイン式受信機が普及した欧米とは大きく異なった。日本では戦後になってようやくスーパーヘテロダインが普及したのであった。

テレビの開発も欧米とほぼ同時であったが戦前には実用化にはいたらず、技術格差はむしろその後の戦争の過程で開いた。放送開始は1953（昭和28）年であったが、受像機を製造するには外国特許の実施権の取得やキー・デバイスであるブラウン管製作についての技術ノウハウの導入が必要であり、ラジオと違って大企業に有利であった。日本では、業界による普及型の設定の試みや物品税の税率の関係から製品は14型に集中し、企業間競争の焦点が絞られたことで急速にテレビ価格が低下していった。そのことで普及率は欧米に比べて急速に上昇した。その過程で鍛えられた小型テレビ技術は、大型テレビ中心であったアメリカ市場へ日本企業が進出す

にも未熟で極めて高価であ
これも進駐軍への納入を契
占領軍の指導もあって、冷
高度化させた。冷媒サイク
1952年の日立の小型機が一
しかし、高価であったため
テレビの次であった。

1960年代後半になると、
うに、自動車、カラーテレ
エアコン（クーラー）の普及
には「ヨーロッパ並の賃金」
所得も高くなったことが背

続いて1970年代から80年
となったのは、VTR（ビデオ
録の開発も欧米とほぼ同時
の永井健三による交流バイ
後の東京通信工業（ソニー）
発の基礎となった。東芝の

小項目で個別技術・事項について詳説

なった。
空管の革新であ
ップス（Philips）
ていた東京電気
、また、日本的

カでは、遠距離
ズが強く、1930
パーヘテロダイ
ーカは音質のよ
となったが、そ
構成となる技術
は様々であった
ーズがあり、同
ることになった
であり、各局を
、他国の放送の
で、回路はスト
マグネチックと
、部品による受
。とくに1930年
波整流の「並4

増した。1968年頃からはICを採用したラジオが開
され、小型化がいっそう進んだ。

日本のラジオの生産は輸出に主導されて1960年代
で増加したが、1970年頃から下降を始めた。発展途
国などの追い上げから輸出が伸びなくなったのが一
であった。

〈参考文献〉　岩間政雄『ラジオ産業廿年史』無線合
新聞社、1944／電子機械工業会『電子工業20年史
1968／平本厚「日本におけるラジオ工業の形成」『
会経済史学』66-1、2000　（平本　厚

テレビ

テレビの着想は19世紀からあり、画を
気などを利用して送ろうとする試みが
けられていた。ドイツのP. Nipkowに
るニポー円板の発明（1884年）などから、機械式テレ
が現れたが、1933年のアメリカ・RCAのV. Zworyk
によるアイコノスコープの発明は、機械式の弱点
あった送像側の感度をあげることに成功し、以後、
電子式テレビが急速に進歩することになった。

日本でも、1926（昭和元）年に高柳健次郎が機械式
電子式の折衷方式でテレビ実験に成功した。日本放
協会は高柳を招いて、1940年に予定されていた東京

◆◇◆内容目次◆◇◆

1. 総説 日本産業技術・維新から1980年代まで（中岡哲郎）
2. 道具（生活道具や工芸関連道具を中心に）（山口昌伴）
3. 機械（鈴木　淳）
4. 素材（木と石と土）（石村眞一）
5. 素材（鉄）（奈倉文二）
6. 人工の素材（化学）（高松　亨）
7. 産銅業（内田俊秀）
8. 石炭産業（後藤邦夫）
9. 動力と動力システム（橋本毅彦）
10. 鉄道と船（堤　一郎）
11. 航空機と自動車（坂上茂樹）
12. 情報・通信（後藤邦夫）
13. 生産技術（中岡哲郎）
14. 農業・林業・漁業（堀尾尚志）
15. 食品加工業（吉田　元）
16. 繊維と衣服（内田星美）
17. 耐久消費財（平本　厚）
18. 建築とデザイン（麓　和善）
19. 環境技術（末石冨太郎）
20. 学協会と技術者集団（沢井　実）
21. 技術者教育（沢井　実）
22. 研究開発機関（田中一郎）
23. 1980年代以降の産業技術（後藤邦夫）

（　）内は、大項目担当者. 執筆者計123名.

鉄道日本文化史考

宇田 正著　　最新刊

日本の近代化のなかで陸蒸気＝鉄道がもたらしたものは、はかり知れない。本書では「文化の鏡」としての鉄道をとりあげ、知識人の体験や一般人の認識から民俗・観光（巡礼）・教育との関わりを通して、鉄道が日本人の内面的形成に果たした文化的役割を明らかにする。

［内容］
序章「文化の鏡」としての鉄道
Ⅰ章 鉄道初体験と近代への文化的覚醒
Ⅱ章 日本人一般の鉄道認識の形成
Ⅲ章 鉄道の発達と伝統文化的契機
Ⅳ章 国民教育と鉄道の役割
Ⅴ章 地域社会と鉄道・駅

▶A5判・350頁／定価5,775円　ISBN978-4-7842-1336-8

雑誌『大大阪』〔CD-ROM〕

大正14年～昭和19年

大阪都市協会企画発行

雑誌『大大阪』の大正14年12月～昭和19年１月までの全巻約33,000ページにおよぶ膨大な文章・図版・広告などのすべてをCD-ROM２枚に完全収録。
都市制度・地方行政制度・都市計画・公共事業・産業経済・公害・社会・芸術・社会風俗・地誌など多方面にわたる内容。題名・著者名・発行年月・分野・キーワードの５検索が可能。
※Windows®専用

▶定価99,750円（直販扱）

大阪砲兵工廠の研究

三宅宏司著　　〈日本産業技術史学会学会賞受賞〉

明治3年から昭和20年にいたる大阪砲兵工廠はわが国の産業近代化の中で特異な役割を果たしてきた。本書では、同工廠を支えた鉄鋼・材機・冶金・金属加工・化学などの技術的諸分野の内容と生産体制、職工の就業実態及びそれらの変遷過程を明かす。関係図表120余点。

▶A5判・520頁／定価10,080円　ISBN4-7842-0776-7

都道府県庁舎　その建築史的考察

石田潤一郎著

本書では、一次史料をもとに都道府県庁舎の歴史的展開を個別にあとづけ、地方行政制度史・地域史の中で位置づけるとともに、図版史料によってその平面計画及び立面意匠の具体的な把握も試みた。収録図版200余点。

▶A5判・440頁／定価9,030円　ISBN4-7842-0775-9

新世紀を創る。京都大学の工学と貴重技術史資料

京都大学総合博物館編

京都大学総合博物館で開かれた同名の展覧会図録。100年をこえるゆたかな歴史をもつ京都大学の貴重な技術史資料を公開し、また新世紀を創造する工学研究の最先端を展示することによって、工学・技術の発展とその成果、未来への夢を広く社会に紹介する。

▶A4判・100頁／定価2,415円　ISBN4-7842-1210-8

文明随想　継承と移転　日本の底力を読む

小林達也著

豊田佐吉の発明から「愛・地球博」に到るまで、東海地方の創造的活力は単に外国模倣の浮薄な知力だけではない、伝承されたローカルな有形無形のさまざまな力に推されたものである。発明と技術移転の実例を紹介し、道徳・価値観・人間関係を含む地域文化が支持したものであることを証明。

▶四六判・200頁／定価2,625円　ISBN4-7842-1263-9

近代日本公園史の研究

丸山 宏著

近代欧米都市起源の公園が、いかに近代化の装置として導入され、衛生問題・都市問題・記念事業・経済振興策・政治的役割などさまざまな問題を孕みながら受容されてきたか、その歩みを社会史のダイナミズムのなかにとらえた一書。

▶A5判・400頁／定価8,820円　ISBN4-7842-0865-8

近代地方政治と水利土木

服部 敬著

淀川・安威川・神崎川の水利構造の変遷と分析、沿岸住民の治水運動と中央・地方議会と政党の対応、近代化の意味と中央集権的近代国家の性格を地域史の視座から問う。

▶A5判・440頁／定価6,930円　ISBN4-7842-0873-9

図説万国博覧会史　1851–1942

吉田光邦編

万国博覧会は、19世紀に花開いた新しい情報環境の文明の一形式であり、文明のあらゆる形態の巨大な集積体であった。1851年第１回ロンドン万国博覧会から1942年の幻のＥＵＲまでを対象に、図版約300点を収録。カラー口絵12点。

▶A4判変型・224頁／定価7,875円　ISBN4-7842-0393-1

万国博覧会の研究

吉田光邦編

19世紀、体制を整備しつつあった国家・近代的な企業・国民という意識に支えられた大衆社会を基盤にスタートした新しい情報メディアの場、博覧会の諸相を明かす学際的研究。論文15篇を収録。

▶A5判・368頁／定価6,825円　ISBN4-7842-0414-8

幕末軍事技術の軌跡　佐賀藩史料『松乃落葉』

杉本 勲・酒井泰治・向井 晃編

本書は、幕末期、西欧科学技術導入が最も進んでいた佐賀藩の藩主鍋島直正の側近として活躍した本島藤太夫松蔭の編著『松乃落葉』の翻刻。杉本博士を中心とする「西南諸藩洋学史研究会」が翻刻、解説、異本との校訂など10年の歳月をかけて完成したものである。

▶A5判・450頁／定価8,925円　ISBN4-7842-0467-9

近代西洋文明との出会い

黎明期の西南雄藩

杉本 勲編

佐賀藩を中心とした幕末期の西南雄藩と近代西洋文明との出会い、またその受容の歴史を、関連する諸側面から掘下げ、近代化の諸相を明らかにする。

▶A5判・300頁／定価4,830円　ISBN4-7842-0566-7

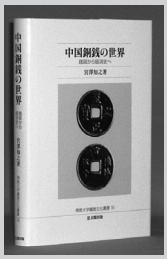
佐久間象山と科学技術
東 徹著
佐久間象山が入手したとされる蘭書を書誌的に明らかにし、そこに記載されている内容と象山の言説との対応関係を調査。幕末から明治にかけてのわが国における科学技術の受容を考察した実証的研究。
▶A5判・283頁／定価7,980円　ISBN4-7842-1101-2

幕末期長州藩洋学史の研究
小川亜弥子著
幕末維新期の変革に洋学が果たした役割について、この変革の重要な担い手となった長州藩の洋学の実態から検討。軍事科学化・洋学史的側面からのアプローチにより、長州藩明治維新史研究の空白を埋める一書。
▶A5判・284頁／定価7,140円　ISBN4-7842-0967-0

実学史研究〔既刊11冊〕
実学資料研究会編
都市・農村の一般民衆の生活経験に基づいて生み出された生活改善のための記録や機器資料を積極的に発掘・活用し、江戸時代初頭から19世紀にわたるそれぞれの展開状況の実情を捉えるシリーズ。
▶A5判・平均300頁／既刊揃定価62,790円［分売可］

歴史災害のはなし
中島暢太郎・三木晴男・奥田節夫著
古文書をもとに江戸時代の気象災害・地震・崩壊災害を検証。中国地方の気象災害や近江地震、雲仙眉山の崩壊災害などを取り上げる。巻末に著者による鼎談「災害史と災害の科学」を付す。　［外装やや汚れ］
▶A5判・252頁／定価3,045円　ISBN4-7842-0731-7

近世後期瀬戸内塩業史の研究
山下 恭著
塩業と醤油業における開発・経営・塩専売制・流通問題を細かく分析し、さらに塩業における燃料問題と労働条件を数量的に解明した基礎的研究の一書。
▶A5判・300頁／定価6,300円　ISBN4-7842-1287-6

中国銅銭の世界　銭貨から経済史へ　最新刊
宮澤知之著　佛教大学鷹陵文化叢書16

近代以前の長い期間、中国貨幣の主役の位置を占めた銅銭の歴史を中心に、先秦から明代までの中国貨幣史の大きな流れを見る。文献学と考古学と古銭学とを組み合わせることで、たとえば文献学だけでは分からない点を考古学や古銭学で補い、あるいは古銭学から立論して文献で検証するというように、現在の中国貨幣史の到達点を学問分野にこだわらず利用した中国貨幣通史。
図版180点原寸収録（一部除く）
▶A5判・332頁／定価2,520円　ISBN978-4-7842-1346-7
みやざわ・ともゆき…佛教大学教授

石見銀山〔全2冊〕
石見銀山歴史文献調査団編　［外装やや汚れ］
島根県・太田市・温泉津町・仁摩町の共同事業で取り組まれた石見銀山遺跡の広範な文化調査によって明らかになった、銀山をめぐる生産・流通・生活の実態を論じる。論文集と年表・編年史料綱目からなる基本文献。
▶A4判・各320頁／定価16,275円　ISBN4-7842-1127-6

絶対透明の探求　遠藤高璟著『写法新術』の研究
尾鍋智子著
加賀藩士遠藤高璟が著した『写法新術』は、まさに江戸後期の視覚変革がもたらした一つの結実であった。遠藤の倫理観、写法の理論と視覚論の関係に注目して遠藤の視覚論を明らかにする。
▶A5判・310頁／定価6,090円　ISBN4-7842-1294-9

洋学史論考
佐藤昌介著　思文閣史学叢書
明治維新の胎動を準備した大槻玄沢・高野長英・小関三英・福沢諭吉・渡辺崋山らの諸業績の分析を通して洋学の受容と発展を解明し、あわせて近代化に果した軍事の科学化と軍制改革・軍楽などを論じる。
▶A5判・410頁／定価8,190円　ISBN4-7842-0782-1

鉄　砲　伝来とその影響
洞 富雄著
日本の中国侵略戦争時、軍部への反発から書いたという論文から生まれた『鉄砲伝来記』(1939) 以来半世紀、日本史家としての関心から鉄砲に取り組んできた著者の総決算ともいえる力作。
▶A5判・530頁／定価10,290円　ISBN4-7842-0657-4

十九世紀日本の園芸文化
平野 恵著　江戸と東京、植木屋の周辺
近世後期から明治前期、19世紀における園芸文化史を江戸・東京を中心に叙述。旧来の園芸史では言及されなかった本草学・見世物研究・文芸分野を視野に入れ、「園芸文化」という新しい領域を開拓する意欲作。
▶A5判・544頁／定価6,825円　ISBN4-7842-1292-2

京都 高瀬川　角倉了以・素庵の遺産
石田孝喜著
洛中の中心部と伏見港をむすぶ10.5キロの高瀬川は、近世京都の発展に寄与してきた。本書では、その歴史と文化の姿を多方面から検討する。
▶A5判・250頁／定価2,310円　ISBN4-7842-1253-1

貨幣と鉱山
小葉田淳著
日本経済史研究の泰斗が中世から近世にいたる貨幣と鉱山に関する論考を集成。
▶A5判・300頁／定価8,190円　ISBN4-7842-1004-0

日本銅鉱業史の研究
小葉田 淳著
足尾・面谷・別子など日本を代表する鉱山の個別の史的調査研究に加え、付篇として産銅に関する近世の銅貿易と鋳銭についての論稿を収録。
▶A5判・860頁／定価19,950円　ISBN4-7842-0760-0

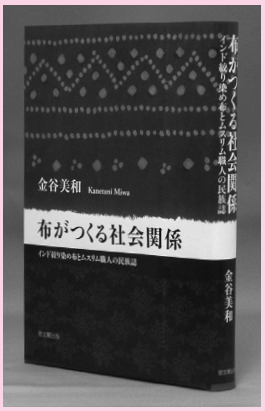
近世鉱山社会史の研究
荻慎一郎著　〈高知出版学術賞受賞〉
鉱山社会史研究の視点から、従来の研究で欠落していた支配・経営構造、技術受容と生産体制、労働組織、鉱山法や住民の社会生活などの実態を大葛金山・院内銀山などの一次史料を通して明かす先駆的な業績。
▶A5判・640頁／定価13,440円　ISBN4-7842-0900-X

布がつくる社会関係

最新刊

インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌

金谷美和著



染色業者カトリーと、カトリーの生産する布について民族誌的記述を行うことで、布を生産することによって構築される社会関係と、布の使用によって構築される社会関係について明らかにする。「手工芸」という表象にとらわれがちな絞り染め布のもつ物質性への注目を喚起することによって、表象論に傾きがちであった物質文化研究の新たな可能性を拓くこと、なかでも布を視点として社会を分析するという文化人類学的研究の新たな可能性を拓くことを目指した意欲作。

[目次]

インド「手工芸」の誕生／調査地カッチの概要／「染色カースト」としてのカトリー／絞り染め布の生産形態／生産分業と親族関係／移動と分業のはじまり／「手工芸」への対応／頭に被る布の意味と用法／指標としての布／布着用の変化と境界

▶A5判・336頁／定価6,510円　ISBN978-4-7842-1341-2

かねたに・みわ…1969年生．京都大学人間・環境学研究科博士課程単位取得退学，京都大学人間・環境学博士(2005)．現在，日本学術振興会特別研究員、国立民族学博物館外来研究員．

壁紙のジャポニスム

松村恵理著　〈ジャポニスム学会賞受賞〉

本書では、欧米に渡った日本の装飾紙の調査、後に大きな影響を与えたシェノーの日本美術論をも踏まえ、19世紀後半から20世紀前半にわたる壁紙のジャポニスムをそのデザインの具体例にそってさぐる。

▶A5判・240頁／定価3,360円　ISBN4-7842-1098-9

花洛（みやこ）のモード　きものの時代

京都国立博物館編

桃山から江戸時代を通じて服飾の中心となった「きもの」に焦点をあて、小袖・打掛・胴服・羽織などから笄・かんざし・髪型、さらに屏風などに描かれたモードも含めて図版全225点を収録（オールカラー）。「今用御ひいなかた」（翻刻）と「御用雛形帳」の調査一覧表なども併載。

▶A4判・550頁／定価26,250円　ISBN4-7842-1072-5

柳宗悦と民藝運動

熊倉功夫・吉田憲司編

柳宗悦の思想とその仕事は、形をかえながら継承していく必要があるという認識のもと、各世代の研究者が自由に問題意識を持ち、それぞれの視点・立場から柳宗悦像を論じる。国立民族学博物館で2000年から2年間にわたって行われた共同研究の成果。

▶A5判・354頁／定価4,830円　ISBN4-7842-1236-1

民芸運動と地域文化　民陶産地の文化地理学

濱田琢司著

民芸運動という工芸をめぐる文化運動とやきもの産地との影響関係を中心に、産地の人々が外部者によって形成されたイメージや価値観を客体化し活用しつつ地域文化を形成していくプロセスを検証。文化人類学、観光人類学、美術史学の成果を取り入れた「産地」の文化地理学。

▶A5判・304頁／定価5,145円　ISBN4-7842-1288-4

視覚の一九世紀　人間・技術・文明

横山俊夫編

視覚という世界の広がりと視覚メディアを中心とした19世紀の文明史的研究。論文12篇を収録。

[内容]

Ⅰ 19世紀の明暗／Ⅱイメージと人間／Ⅲ視覚の文明学

▶A5判・464頁／定価6,090円　ISBN4-7842-0700-7

北太平洋の先住民交易と工芸

大塚和義編

海峡をこえ島々をめぐり半島から大陸へ――太平洋の諸地域をつなぐ先住民のさまざまな交易ルートの実態を明かし、あわせて彼らの文化遺産である伝統的な工芸芸術を紹介する大型ビジュアル本（カラー図版150余点を収録）。

▶A4判・150頁／定価2,940円　ISBN4-7842-1087-3

陶器全集〔全４巻〕

加藤唐九郎他編

本書は、昭和6年に陶器研究・鑑賞界で望み得る最高の執筆者をむかえ、はじめて陶磁の世界に近代研究の光をあてた不滅の名著。再刊にあたっては、第一線で活躍中の研究者により一部改訂を加え、全巻に索引を付した。

▶菊判・総2900頁／定価38,850円　ISBN4-7842-0207-2

欽定西清硯譜〔全２巻〕

韓国文化財管理局編

本書は乾隆時代に著わされた「欽定西清硯譜」の写本で、乾隆内府伝世の名品を収載。その素材を陶・石に分類、宮廷画家による精巧な写生図を掲載し、題識銘記等の解説を付した貴重な文献の影印本。　[外装やや汚れ]

▶B5判変型・総1900頁／定価36,750円　ISBN4-7842-0206-4

金唐革史の研究

徳力彦之助著

1470年頃、ルネサンスの最盛期のフィレンツェで生れた金唐革。本書は金唐革の発祥以来の歴史、各国別の金唐革の特色、技法を網羅し、ルネサンス・ロココ・バロック期を中心とする豪華絢爛な貴重な図版を多数収録した豪華本である。皮革工芸家、染織工芸家座右の書。

▶B4判・200頁／定価36,750円　ISBN4-7842-0267-6

宝石誌

鈴木　敏編　[外装やや汚れ]

宝石は上古より金銀と共に世に珍重されてきたが、その資料は少ない。本書は大正5年理学博士鈴木敏が地質鉱物学的立場から宝石を学術的に論じたものである。内容は、緒論・宝石通論・宝石持論からなり、地質鉱物学研究者、貴金属関係者にとって座右の書。

▶菊判・302頁／定価5,250円　ISBN4-7842-0245-5

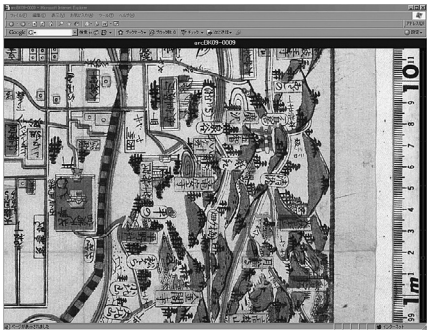
立命館大学21世紀ＣＯＥプログラム

「京都アート・エンタテインメント創成研究」

ＣＯＥ研究員
金子貴昭

立命館大学21世紀ＣＯＥプログラム「京都アート・エンタテインメント創成研究」は、日本文化の発信源「京都」を中心に据え、京都学や日本学、日本史学に関連するデジタル・アーカイブ（以下、アーカイブ）を構築し、それらのデジタル・コンテンツを流通させることにより、人文科学分野における新たな研究スタイルの確立を目的としている。さらにそれらの知的情報をＧＩＳ（地理情報システム）上に配置し、既存の研究領域や地域などの枠組みを超えた知的協調空間（アート・エンタテインメント）の構築を目指すものである。

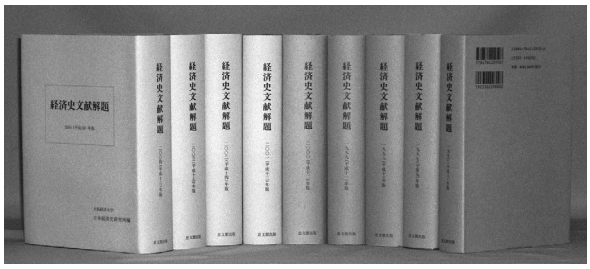
このプログラムの中で、筆者は主に静止画のアーカイブ構築に携わっている。平易にいえば、人文科学分野で研究素材とされる文化財（書籍、絵画資料など）や研究成果のデジタル化及びメタ・データ構築、ウェブ公開までを行う活動である。筆者が構築に関わったアーカイブの例は非常に多くなってきているが、最近では地図に代表される大型資料のデジタル化に取り組み、巨大な画像をウェブ上でストレスなく閲覧できるシステムを用いて公開を開始した。来年度は光源の当て方を工夫し、板木のアーカイブを行うプロジェクトに関わる予定であり、様々なアーカイブ手法に対する興味はつきないところである。



「日本・京都関連地図コレクションデータベース」の閲覧画面　巨大な画像を高速表示するツールを用いて公開しており、大型資料の細部まで閲覧することができる

右のように筆者の研究活動は非常に実務的な傾向が強く、むろん実践を通して情報技術に関する知見を得ることは多い。しかし見えてくる課題は、むしろアーカイブを享受し、恩恵を受けるべき人文科学分野（あるいは一般の享受者）のものが多いのである。先日行われたシンポジウムにおいて、「デジタルはオリジナルの質感に及ばない」「デジタルは無味乾燥である」といった痛烈なデジタル批判が散見されたが、これらは「文化財のデジタル化＝オリジナルに取って代わるレプリカ制作」という根強い誤解によるものと理解している。アーカイブが存在しなければ、時間をかけて文化財がある場所まで足を運ばなければならない。通常、閲覧を許されない文化財も存在する。しかしアーカイブがあれば、その文化財のおよそを知り得るし、それはさらにオリジナルへの興味をかき立てる媒体ともなろう。つまり筆者らは、知的活動への門戸としてアーカイブを展開しているのであり、最後には現物主義を徹底しなければならないという前提で活動を行っているが、ユーザーから十分な理解が得られていないのが現実である。啓蒙活動が十分でないままにデジタル・コンテンツだけが溢れてしまった現在、依然として人文科学分野がアーカイブとどう向き合うかという基本的かつ大きな課題が残っているように思われてならない。

なお本プログラムで構築したアーカイブのうち、権利関係の処理ができるものは、立命館大学アート・リサーチセンター（http://www.arc.ritsumei.ac.jp）のサイトから閲覧可能である。またそれらは、ＧＩＳ「バーチャル京都」と有機的にリンクしており、本ＣＯＥプログラムの成果報告として立命館大学文学部地理学教室のサイト（http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/geo/coe/index.html）で公開が始まっている。ご参照下されば幸いである。



有余年にわたって公刊された文献がカヴァーされている。いや、本庄は初期においては一九二〇年以前までに公にされた文献を取上げているので、かれが始めた経済史文献解題は、日本における経済史、史学一般に関する文献の全てとはいえなくとも、ほとんどを網羅している。

こうした経済史文献解題の紙版は二〇〇五年版をもって幕を閉じる。戦前から戦後一九七三年版まで日本評論社（一時期日本評論新社）、一九七四年版から一九九五年版まで清文堂出版、一九九六年版から二〇〇五年版まで思文閣出版が出版発行を担ってくれた。心底より感謝する。

紙版廃止は文献解題事業の終了を意味するのではない。研究所開所七〇周年を期して、本事業を大きく飛躍させようとしたがためである。データベース化であり、国際化である。私たちは一〇年ほど前、『経済史文献解題』がどれくらいの数の図書館に入っているのか、調査したことがある。予想していたより多くの図書館が入れてくれていた。また、海外の図書館にも入っていて、とてもうれしく思った。しかし昨今、研究情報がインターネットを通して、国を越えて容易に入手できるようになってきている。著書論文を分野別に分類し、解題・目次情報を付しているところに大きな特長をもつ経済史文献解題を、もっと多くの人びとに、国を越えて世界中の人びとに容易に届けるために、データベース化と国際化に取り組んだ。

二〇〇四年版よりデータベース化し、インターネットを通じて経済史文献解題情報を入手できるようにした。最近は多くの単行本にも欧文タイトル等の欧文情報が盛られている。雑誌論文にはほとんどのばあいそれが盛られている。こうした日本語文献の欧文情報もデータベース化している。同時に既に刊行された『経済史文献解題』のデータベース化を進めている。現在、一九八九年版以降の情報を同一の画面から検索することができる。二〇〇六年度でさらに一〇年ほどさかのぼる。

さらに計画しているのは、過去に収録した文献の欧文情報を収集することである。これは大事業で、一私学では資金的に太刀打ちできず、今、科学研究費補助を申請している。もう一つ計画している。海外の研究情報を入手しデータベース化することである。戦前より本庄たちがやったことを再現することであるが、今日の研究状況からすれば海外の研究者との協力が不可欠である。現在、まずは中国と韓国の研究者との協力を築こうと努力している。本年一二月には、中国や韓国から研究者を招いて「東アジア経済史研究会」を開催する予定である。

（大阪経済大学日本経済史研究所所長）

データベース検索は、日本経済史研究所ホームページ http://www2.osaka-ue.ac.jp/nikkeisi/ からご利用できます。

経済史文献解題

1996（平成８）年版【品切】
1997（平成９）年版【品切】

1998（平成10）年版	12,390円	ISBN4-7842-1015-6
1999（平成11）年版	12,390円	ISBN4-7842-1050-4
2000（平成12）年版	13,440円	ISBN4-7842-1083-0
2001（平成13）年版	11,340円	ISBN4-7842-1131-4
2002（平成14）年版	12,390円	ISBN4-7842-1176-4
2003（平成15）年版	12,390円	ISBN4-7842-1208-6
2004（平成16）年版	14,490円	ISBN4-7842-1280-9
2005（平成17）年版	14,490円	ISBN978-4-7842-1351-1

▶46判／平均650頁

※2005年版で終刊、2006年版以降はインターネットで公開予定
（上掲記事参照）

黒正巖著作集

［全７巻］

第１巻　百姓一揆の研究（解題：山田達夫）
第２巻　百姓一揆論（解題：藪田貫）
第３巻　岡山藩の研究（解題：倉地克直）
第４巻　社会経済史の研究（解題：土肥恒之）
第５巻　経済地理学の研究（解題：竹岡敬温）
第６巻　日本経済史（解題：大島真理夫）
第７巻　農史の研究 年譜・著作目録（解題：徳永光俊）

▶A5判・総2800頁／揃定価58,800円　ISBN4-7842-1122-5

「経済史文献解題」紙版終了とデータベース化・国際化

本多　三郎

一九三三年創設の日本経済史研究所初代代表理事に就いた本庄栄治郎が、最初に「経済史文献解題」を世に問うたのは一九二一（大正一〇）年のことであった。京都帝国大学助教授であった本庄が著した『日本経済史原論』第六章「日本経済史研究の材料」（一九二四年『日本経済史文献』として出版）がそれである。本庄は一九二七年に『日本経済史文献 続』を出した後、経済史文献解題を自らが主宰する「経済史研究会」の研究活動に引き継いだ（一九二九年）。同年一一月より発行される月刊誌『経済史研究』のほぼ毎号に、日本経済史文献一覧や東洋経済史文献一覧、西洋経済史文献一覧などとして、経済史文献解題を掲載したのがそれである。ついで一九三三年、本庄や黒正巌たちによって創設された日本経済史研究所が、雑誌『経済史研究』とともに、この事業をそっくり継承して今日に至っている。

日本で最初の経済史講座教授に就いた本庄と、最初の農史講座教授に就いた黒正たちによって、福田徳三や内田銀蔵を嚆矢とする日本における経済史研究が、いよいよ本格的に進められることになった。時あたかも、イギリスでは一九二六年に「経済史学会」が設立され、翌二七年には『経済史評論』が創刊されている。ほぼ同じ時期、アメリカでは『経済経営史雑誌』（一九二八年）が、フランスでは『社会経済史年報（アナール）』（一九二九年）が創刊されている。日本では上記「経済史研究会」に少し遅れて、一九三一年に「社会経済史学会」が結成されている。

日本経済史研究所は、『経済史研究』第二六号（一九三一年十二月）以来のやり方を踏襲した。『経済史研究』毎号に「最近の経済史学界」と題して経済史文献解題を掲載し、それらの一年分をまとめるだけでなく、一年ごとの研究動向と主な著書の紹介批評を加えて、毎年、「経済史年鑑」として特集を編んでいる。

一九四五（昭和二十）年一月、『経済史研究』第三二巻第一号（『経済史年鑑 昭和十九年版』）の発行をもって、研究所の活動は停止を余儀なくされた。よくぞ戦争末期まで持ちこたえたと思われる。

戦後、一九五五年、本庄たちが再開した「経済史研究会」によって『経済史年鑑』復刊第一冊が発行された。途中『経済史文献』と改称されたのち、一九六〇年、大阪経済大学によって再建された日本経済史研究所から『経済史文献解題』が編集刊行され、今に至っている。

『経済史年鑑 昭和八年版』から数えて二〇〇五年版まで、年刊の『経済史年鑑』および『経済史文献解題』が実に六二冊におよぶ。一九二一年の本庄『日本経済史原論』までさかのぼれば、今日に至る八〇

◆大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書◆

徳永光俊編
黒正巌と日本経済学
1940年前後の京都大学を中心とした「日本経済学」の動きの中で、黒正らはどのような役割を果たしたのか。師である本庄栄治郎の学問と彼が打ち立てた「日本経済学」の主張の検討、黒正と戸田海市、京都経済学者たちとの関係についても考察。
▶A5判・250頁／定価2,835円　ISBN4-7842-1242-6

山本 正 著
「王国」と「植民地」
◎近世イギリス帝国のなかのアイルランド◎
「王国」にして「植民地」――アイルランドのイギリス帝国におけるこの両義性は、近代国家イギリスの他に類をみない特異なありようを示してもいる。16～18世紀におけるアイルランドのイギリスとの複雑な関係を丹念に分析し、その位置づけと変遷を明かす。
▶A5判・236頁／定価2,940円　ISBN4-7842-1096-2

◆大阪経済大学日本経済史研究所史料叢書◆

家近良樹編
稽　徴　録　◎京都守護職時代の会津藩史料◎
家老簗瀬三左衛門真粹に仕えていた武藤左源太が藩庁からの布達・布令（文久２年～明治２年）や巷説（世間の噂・風談）を写しとったもので、幕末期の会津藩の政治動向のみならず藩が直面した財政上の危機的状況を生々しく伝える貴重文献（原本全４冊）。註釈・解説・索引を付す。
▶A5判・280頁／定価6,825円　ISBN4-7842-0994-8

渡邊忠司・徳永光俊共編
飛脚問屋井野口屋記録〔全4巻〕
飛脚問屋としての営業規則・仲間の規約、飛脚人夫の雇い方、飛脚賃、飛脚経路などや、藩主・家臣との間での飛脚の認可・契約の証文など交通・通信史の基本史料。
第１巻　享保８年～天明７年　9,240円　ISBN4-7842-1078-4
第２巻　天明元年～文化９年　10,080円　ISBN4-7842-1108-X
第３巻　文化元年～文政９年　10,920円　ISBN4-7842-1147-0
第４巻　文政４年～天保14年　12,390円　ISBN4-7842-1186-1
▶A5・平均450頁／揃定価42,630円

史料探訪 ㉘

奈良絵本・絵巻の叢書

慶應義塾大学文学部教授
石川　透

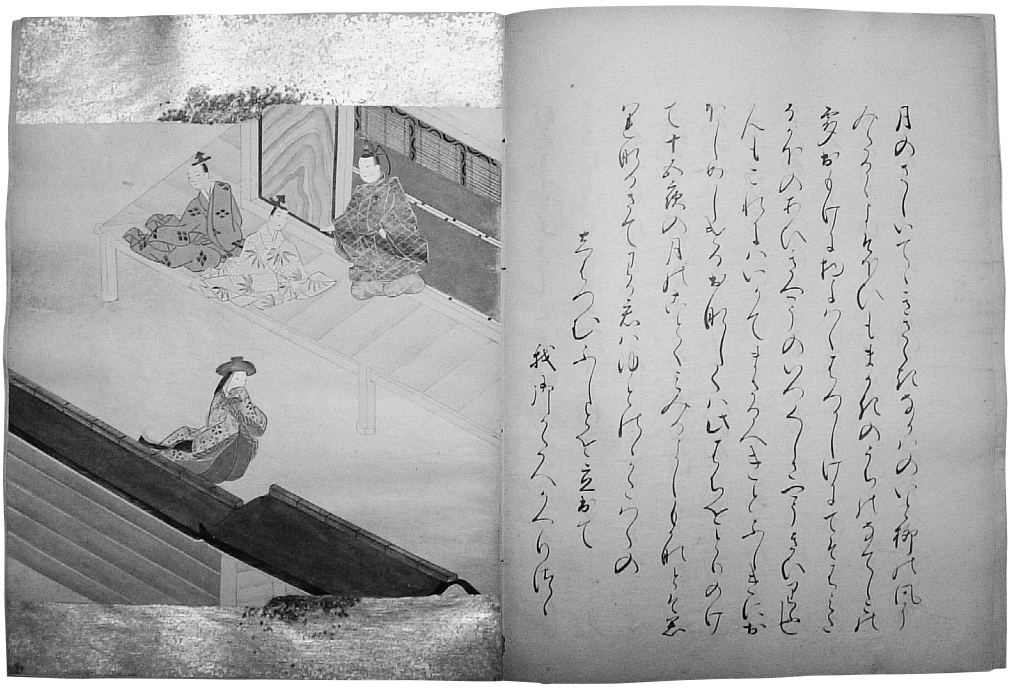
今回私が取り上げるのは、今まとまって残されているというよりも、かつてまとまっていたであろう史料についてである。室町時代後期から江戸時代中期にかけて、今日、奈良絵本と呼ばれる作品群が作られた。極彩色・直筆による手作りの作品で、同様な絵巻物も存在することから、私は奈良絵本・絵巻と呼ぶことにしている。その具体例は、思文閣古書資料目録にカラー写真とともによく掲載されているし、３年前には思文閣美術館で「奈良絵本・絵巻の世界」展を開催しているので、御存知の方も多いと思う。

この奈良絵本・絵巻は、その美しさから注目され、浮世絵と同じように海外にも流出しているのだが、いつ誰がどこで製作したかという基本的なことがわかっていない。要は、作品自体に奥書や署名がないのである。そこで、奈良絵本・絵巻を研究するに当たり、どこにどのような作品が存在するかということから調べなくてはいけないのだが、いろいろ実物の作品を見ていくと、さまざまなことに気付く。まず、ごくまれに、署名や製作主と思われる印記が押されているものが存在する。それを契機に詞書きの筆跡による分類をすると、署名はなくとも筆者がわかる場合がある。江戸時代前期の有名人でいうと、最大の仮名草子作家である浅井了意が、奈良絵本・絵巻の詞書きを執筆していることが明らかになった。これらのことについては、拙著『奈良絵本・絵巻の生成』（2003年８月、三弥井書店）にまとめ、それを補う作品についても論文等で随時紹介している。

この浅井了意筆奈良絵本・絵巻の存在等により、江戸時代前期が奈良絵本・絵巻の製作のピークであること、製作場所は京都が多いであろうこと、等々がわかってくる。この江戸時代前期にも、製作と関わってかつては一つの文庫の中にまとめられていた奈良絵本・絵巻も存在したはずである。しかし、今回は、奈良絵本・絵巻製作の晩期、すなわち、江戸時代前期から中期にかけて製作されたと思われる作品を取り上げたい。

何を隠そう、そのまとまりに気付いたのは、かつて思文閣出版古書部からひとまとまりの奈良絵本の残冊を私が購入したことに始まる。それは、『伊勢物語』『鉢かづき』『笠間長者鶴亀物語』『松竹物語』『松ケ枝姫物語』『岩屋の草子』の６点の残冊であった。いわゆる半紙本型の縦型奈良絵本で、雰囲気の良いものであった。この６点を見て驚いたのが、その詞書きは全て筆跡が同じなのである。また挿絵の部分も、残されたものを見る限りでは、霞のかたちや筆致が全て等しい。『源氏物語』等の長大な作品を除き、奈良絵本・絵巻は１点の作品の中で筆跡や画風が変わることはないから、この６点は、全て同じ詞書き筆者、同じ絵師により作られたのであろう。それがばらばらになりつつも一緒に市場に出てきたということは、作られてからずっと同じ所に所蔵されていたということである。６点もの奈良絵本・絵巻の残部を、同じ筆跡ということで今日収集するのは困難なことである。

そして、この６点と全く同じ筆跡、同じ画風の奈良絵本がいろいろな所で見つかるのである。この６点以外の作品まで、同じ場所にあったかは調べようがないが、たとえ６点だけでも同じ場所にあったということは、一つの叢書として保存していたことになる。奈良絵本・絵巻の中心を占める御伽草子には、その名前の由来となった御伽文庫という叢書があった。それは、版本として23点の作品をまとめたものである。これと同じようなことが、写本でも行われていたということになる。



奈良絵本『鉢かづき』

このような例は、御伽草子と同じ室町時代から江戸時代初期にかけて流行した幸若舞曲にもみられ、版本の舞の本をもとに製作したと思われる絵巻と奈良絵本が、いずれも完全なかたちではないが、ある程度まとまって残されたことがある。この舞の本の絵巻と奈良絵本は少なくとも３セット作られた可能性があるのだが、残念ながら今は完全なかたちでは残っていない。おそらくは江戸時代前期における最高級の商品であるから、いったんは大名家に納められていたであろうが、明治以降ばらばらになったものと思われる。

『伊勢物語』等の６点の奈良絵本の残冊も、１点として完全なかたちで残された作品は別に売り出された可能性もある。もともとは同じところから一括して出てきたものを、今日の商品として売りやすいように、作品ごとにばら売りすることはしばしばみられることである。なお、この６点の奈良絵本の詞書き筆者は、この叢書とは違う叢書も作っているし、絵巻の作例もある。さらに、この筆跡は、宝永２年（1705）刊の『西行物語』にもみられることから、まさに江戸時代前期から中期にかけて活躍した筆工によることがわかる。

―MEMO―

「奈良絵本・絵巻の魅力」（仮題）展

８月23～28日　於丸善名古屋栄店　〒460-0008 名古屋中区栄3-2-7

奈良絵本・絵巻国際会議　愛知大会

８月25・26日　於西尾市岩瀬文庫　〒445-0847 愛知県西尾市亀沢町480

※以上２件の問い合わせは以下にお願いいたします。
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45　慶應義塾大学文学部石川透研究室
tel: 03-5427-1178

日本古典随筆の研究と資料 〔最新刊〕

糸井通浩 編　　龍谷大学仏教文化研究叢書

龍谷大学図書館が所蔵している、日本の古典随筆に関する伝写本を悉皆調査した研究プロジェクト「古典随筆伝写本の研究」の成果。『枕草子』『徒然草』雨森芳洲『交隣提醒』についての研究論文７篇に加え、重要と思われる古典随筆伝写本５本を翻刻紹介する。

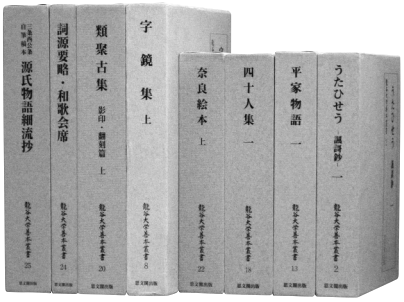
〔研究編〕『枕草子』の耳伝（安藤 徹）／『枕草子』格子考（東 望歩）／『枕草子』「三月ばかり物忌しにとて」段の構成意識（外山敦子）／『枕草子』の語法（糸井通浩）／龍谷大学蔵徒然草伝写本について（木村雅則）／徒然草の近代（朝木敏子）／雨森芳洲『交隣提醒』（山嵜泰正）

〔資料編〕龍谷大学本『枕草子』（零本）翻刻・解題（忠住佳織）／龍谷大学図書館蔵『徒然草 平忠重伝写本』翻刻（木村雅則）／龍谷大学図書館蔵『たはれ草』翻刻（万波寿子・糸井通浩・雨森正高）／『たはれ草』諸本の校合（雨森正高・糸井通浩）／龍谷大学本『四季物語』翻刻・解題（外山敦子）

▶A5判・480頁／定価7,560円　ISBN978-4-7842-1349-8

龍谷大学善本叢書

龍谷大学が所蔵する貴重典籍を影印で紹介。
思文閣出版では国文学分野を担当し、国語・国文学研究上重要な資料を学界に広く提供する。



類聚古集 〔全３冊〕

秋本守英責任編集　　龍谷大学善本叢書20

▶B5判・総1800頁／定価59,850円　ISBN4-7842-1041-5

平家物語 〔全４冊〕

大取一馬責任編集　　龍谷大学善本叢書13

▶A5判・平均520頁／定価44,100円　ISBN4-7842-0794-5

三条西公条自筆稿本 源氏物語細流抄

安藤 徹 責任編集　　龍谷大学善本叢書25

▶B5判・706頁／定価29,400円　ISBN4-7842-1234-5

四十人集 〔全３冊〕

家郷隆文責任編集　　龍谷大学善本叢書18

▶A5判・総2100頁／定価50,400円　ISBN4-7842-0970-0

詞源要略・和歌会席

大取一馬責任編集　　龍谷大学善本叢書24

▶B5判・290頁／定価19,950円　ISBN4-7842-1196-9

うたひせう―諷詞鈔― 〔全３冊〕

宗政五十緒責任編集　　龍谷大学善本叢書2

▶A5判・総1700頁／揃定価35,700円

①ISBN4-7842-0420-2 ②ISBN4-7842-0421-0 ③ISBN4-7842-0422-9

【品切】

字鏡集〔全２冊〕　龍谷大学善本叢書８　秋本守英責任編集

奈良絵本〔全２冊〕　龍谷大学善本叢書22　糸井通浩責任編集

俊頼髄脳の研究

鈴木徳男著

『俊頼髄脳（としよりずいのう）』は、源俊頼の著した平安後期の歌学書である。先行歌書や歌学的知見の受容という観点からその構造を分析、さらに享受面を考察し、『俊頼髄脳』の和歌史的意義を浮き彫りにする。付録として伝本の性格を検討した二論を加える。

▶A5判・308頁／定価8,400円　ISBN4-7842-1296-5

延慶本『平家物語』の説話と学問

牧野和夫著

応永筆写（延慶書写奥書）『平家物語』とそこに離合・集散したもろもろの「文・物」を、個々の「説話」を聞いて解いてみる試み。『太平記』生成の最初期の動向と『三国伝記』の生成と応永筆写延慶本『平家物語』とをゆるやかに結ぶネットを明らかにする。

▶A5判・402頁／定価12,600円　ISBN4-7842-1258-2

隔蓂記　総索引 〔全１巻〕

『隔蓂記』研究会編

日記『隔蓂記』（全６巻）の膨大な情報をコンピューターで整理し、人名(8,000)・事項(8,800)・社寺名(550)・地名(500)の四種類の索引にまとめる。

▶A5判・760頁／定価14,700円　ISBN4-7842-1312-0

隔蓂記 〔全７巻〕 本篇６巻 総索引１巻

赤松俊秀校訂

近世文化の最重要史料、金閣鹿苑寺住持鳳林承章自筆の日記。総索引完成を機に、総索引を含めた全７巻セットとして復刊。

▶A5判・総5,130頁／定価73,500円　ISBN4-7842-1311-2

山中 裕 編〔第２期第８巻〕御堂関白記全註釈 【５月刊】

藤原道長の日記「御堂関白記」は平安時代を代表する一級史料。本全註釈は永年にわたる講読会（東京・京都）と夏の集中講座による成果を集成したもので、原文・読み下しと詳細な注で構成されている。

［既　刊］

長和４年　A5判・290頁／定価6,300円　ISBN4-7842-1158-6
寛弘３年　A5判・218頁／定価5,775円　ISBN4-7842-1214-0
寛弘７年　A5判・220頁／定価5,775円　ISBN4-7842-1260-4
寛弘４年　A5判・220頁／定価5,775円　ISBN4-7842-1302-3

［５　月　刊］

寛弘８年　A5判・260頁／定価6,825円　ISBN978-4-7842-1350-4

十八日、辛卯、朝間雨下。公家不断御讃経結願、仍参入、晩景上達部等退出、与・候讃、夕座、
廿日、癸巳、惟憲朝臣奉仕非時、此夜女方中宮参。
廿一日、甲午、此日公家如供養一切経於南殿、暁中宮参上給、朝早参入、其御装束、巻御帳帷、安置新造御仏、御帳左右立散花机、自餘仁王会儀、但上達部座敷南・賈子敷、南・西東上、出居次将座東西高欄下、僧座御帳東西、南上重行、御出。
※廿一日、未一點打鐘、諸僧等承明門外就会聚平張、立門東西五丈平張、其東西南引屏幔、當門又立帳・御讃誦物信濃布五百端、出居参上、諸起陣座参、次、
廿三日、丙申、主上日来不御座尋常、今頗重悩給、仍参入、
廿四日、丁酉、従内罷出、入夜又参入、
廿五日、戊戌、従内罷出、三十講結願也、了又参與女方、召匡衡朝臣、令奉易、仕
廿六日、己亥、主上御悩猶不宜御座、
廿七日、庚子、以余被開東宮御対面、是御譲位事歟、東御装束事、即承奉仕之、令

〔註釈〕
一日、甲戌。枇杷殿より土御門に渡る。
五日、戊寅。三十講を初む、常のごとし。

二十日、癸巳。惟憲朝臣非時を奉仕す。此夜女方中宮に参る。
二十一日、甲午。此の日公家、一切経を南殿に於いて供養せしらる。暁に中宮参上し給ふ。早朝参入す。其の御装束は、御帳の帷を巻き、新造の御仏を安置し、御帳の左右に散花の机を立つ。自余仁王会の儀のごとし。但し上達部の座は南簀子敷に敷き、南（階の）西、東を上とす。出居の次将の座は東西の高欄の下なり。僧の座は御帳の東西、南を上と重行す。御出。
※二十一日、未の一点鐘を打つ。諸僧等承明門外の会聚の平張に就く。門の東西に五丈の平張を立て、其の東西南に引幔を引く。門に当たりて又帳を立つ。御讃誦の物は信濃布五百端なり。出居参上す。諸（起）陣座を起ち参る。次いで、
二十三日、丙申。主上日来尋常に御座さず。今頗る重く悩み給ふ。仍りて参入す。
二十四日、丁酉。内より罷り出づ。夜に入りて又参入す。
二十五日、戊戌。内より罷り出づ。三十講結願なり。了りて又女方と参る。匡衡朝臣を召し、易を奉仕せしむ。
二十六日、己亥。主上の御悩猶宜しく御座さず。
二十七日、庚子。余を以て東宮に御対面有るべき由を聞こえらる。是れ御譲位の事か。東（宮）の御装束の事、即ち承りて之を奉仕しむ。

〔1〕枇杷殿より土御門に渡る　枇杷第、土御門第の二つとも道長にとって重要な居所。枇杷第は近衛南、室町東、土御門殿は土御門南、京極西にあった。道長が土御門第に赴いたのは法華三十講に関わってであろう。

〈本文組見本〉

摂関時代文化史研究【最新刊】

関口 力 著　思文閣史学叢書

「この世をば我が世とぞ思ふ望月の闕けたることもなしと思へば」という和歌に象徴され、「如帝王」と評された藤原道長の時代を中心に取り上げ、リアルタイムに日々の出来事が記される古記録・日記類をもとにして、摂関時代全盛期に生きた人物、および彼らをはぐくんできた社会について考察。政権を掌握した体制派、それに対する反体制派、そしてそうした官人群とは一線を画した非体制派の人物群という基本的な人間類型を示すことにより、あくまで人間が主人公である歴史の在り方について追究する。

▶A5判・484頁／定価9,450円　ISBN978-4-7842-1344-3

日中親族構造の比較研究

官 文娜 著　思文閣史学叢書

日中親族集団の構造を手がかりとして、日本が中国の親族文化、特に宗族制度を受容しなかった理由、またともに「アジア文化圏」に属する両国の、近代以降における西洋異文化との衝突の原因と融合の条件を探る。

▶A5判・444頁／定価7,560円　ISBN4-7842-1241-8

今昔物語集の人々 平安京篇

中村修也著

虚実ないまぜ話柄の豊富な説話文学の古典から平安京という都市で生きる人々――商人・検非違使・怪盗・陰陽師・絵師たち――のさまざまな姿を活写。

▶A5判・220頁／定価2,415円　ISBN4-7842-1213-2

日本古代商業史の研究

中村修也著　思文閣史学叢書

商人や市に関わる人々の存在形態を、交易の発生から出雲・平城京・平安京などにおける都市空間の生活の場で解析し、日本古代における商人と商業の実態を明かす。

▶A5判・400頁／定価7,560円　ISBN4-7842-1268-X

『親信卿記』の研究

佐藤宗諄先生退官記念論文集刊行会編

蔵人の年中行事に関わる一級史料『親信卿記』から四方拝・供立春水など80項目余の記事を抽出・分離し、他本との校訂や内容の研究にとりくんだ一書。関係補論６篇のほか古代史の個別論考４篇も収録。

▶A5判・600頁／定価10,290円　ISBN4-7842-1252-3

●私のノートから●

山中裕編『御堂関白記全註釈』と私

近藤好和

本来公事の記録である古記録が、私の専門とする有職故実にとって不可欠の史料であることは当然であるが、私は現在ふたつの研究会で古記録の註釈に関わっている。ひとつは山中裕先生による『御堂関白記』研究会であり、思文閣出版から『御堂関白記全註釈』が刊行されている。もうひとつは五味文彦先生による『明月記』研究会であり、雑誌『明月記研究』が刊行されている。どちらの註釈も日本史研究者と国文学研究者の共同作業の成果である。

私はどちらの研究会も大切に思っているが、とりわけ私の研究人生と深い関わりを持つのが『御堂関白記』研究会である。なぜならば、國學院大學アメリカンフットボール部主将として勉強など無縁の学生生活を送っていた私が、故鈴木敬三先生のもとで有職故実の研究を志し、大学院に進学した昭和五十六年、はじめて接した古記録が『御堂関白記』であり、大学院のゼミでその指導をしていただいたのが、奇しくもその年から國學院大學の講師となられた山中先生であったからである。

その同じ年、國學院大學や東京大学など山中先生がゼミを担当された東京の大学院生が集まって、『御堂関白記』研究会が始まった。それ以来二十六年、私は研究会のメンバーとして、『御堂関白記全註釈』に深く関わり、山中先生には公私ともに非常に親しくご指導、ご厚誼をいただいている。『御堂関白記』と山中先生との交流はまさに私の研究人生とともにある。

一方、当時は昭和四十三年から続いている京都・平安博物館(古代学協会)での山中先生による『御堂関白記』集中講義もあった。本来は夏・秋の年二回、のちには夏のみとなり(場所も思文閣出版に)、広く一般の方を対象とした講座であるが、大学院のゼミ形式で行われ、関西と関東の大学院生や若手研究者が報告者となり、私も何回か報告している。諸事情で平成十七年以来中断しているが、中断までの八年間は私は関東側のレギュラー報告者として毎年報告を行った。

この集中講義の成果は昭和五十年から雑誌『古代文化』誌上に連載され、それをまとめて最初の『御堂関白記全註釈　寛仁元年』が刊行されたのが昭和六十年であった。そうなると、東京の研究会の目的も全註釈の原稿作りに変わった。また集中講義と東京の研究会だけでは間に合わないために、昭和六十二年頃からは、名和修先生のご好意により、京都・陽明文庫でも全註釈の原稿作りを目的とした研究会が始まった。私はこの陽明文庫の会にも度々参加している。

つまり私は山中先生による『御堂関白記』のふたつの研究会と集中講義のすべてに参加している。すべてに参加しているのは全註釈執筆者のなかでも私だけらしい。

『御堂関白記』研究会も現在では東京の会だけとなった。最終的に全十六巻となる予定の全註釈も、未刊のうち、寛弘八年分は近日刊行、寛弘五年分は入稿済み、長和五年分は未入稿だが、一部を残して集中講義と陽明文庫の会で報告され、集中講義分の大部分は『古代文化』に連載された。余すところは、その長和五年分の一部と、現在東京の研究会で鋭意進めている長徳・長保分だけとなった。

山中先生は二年後に米寿を迎える。『御堂関白記』は難解な古記録だが、その全註釈という壮大な試みの完成は先生の米寿記念を目標としている。全註釈原稿執筆者の皆さん、どうかそれを肝に銘じて、僭越ながら先生に成り代わり、迅速な原稿執筆をお願いしたい。

こんどう・よしかず
1957年神奈川県生まれ．國學院大學大学院文学研究科博士課程後期修了．博士(文学・広島大学)．神奈川大学特任教授．著書に『中世的武具の成立と武士』(吉川弘文館，2000年)，『装束の日本史』(平凡社新書，2007年)など．

(15頁に図書案内)

鈴木　康子著

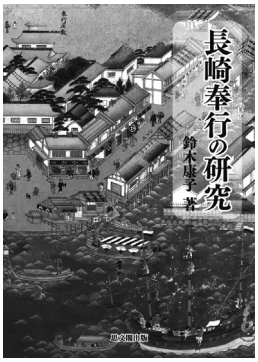
長崎奉行の研究

〔最新刊〕

長崎奉行は、単に長崎という町を支配するだけではなく、唐船やオランダ船貿易の監視、漂流民の引受、外国との政治的交渉などの要務をにない、その重要性は時代を降るごとに増大していった。
本書では、17世紀後期から18世紀中期の約100年間の、長崎奉行の職掌や幕府内における長崎奉行の位置づけの変化、そして長崎奉行自体の特質が変質してゆく状況を解明し、その背景となる幕府の経済政策の推移や、日本側の外国人に対する意識の変化などについても考察を加える。

◎内容目次◎

第１章　貞享～元禄期長崎奉行制度の変化—長崎奉行定員の推移と叙爵を中心として—
第２章　近世中期長崎支配機構について—長崎目付と享保期の長崎奉行について—
第３章　享保の大飢饉と長崎—長崎奉行大森山城守の飢饉対策—
第４章　長崎奉行萩原伯耆守美雅—元禄時代の貨幣改鋳から享保期の長崎貿易政策までの軌跡—
第５章　元文～明和期の長崎奉行と勘定所
—松浦河内守信正と石谷備後守清昌、そして石谷の御国益論を中心として—
第６章　寛延～宝暦期の長崎貿易改革—勘定奉行・長崎奉行兼職松浦河内守信正の施政—
第７章　松浦河内守失脚と用行組事件
第８章　宝暦～明和期の長崎貿易改革—勘定奉行・長崎奉行兼職石谷備後守の施政—
付　録　長崎奉行代々記／長崎奉行関係文献一覧



▶A5判・418頁／定価6,510円　ISBN978-4-7842-1339-9

すずき・やすこ…中央大学大学院文学研究科後期課程修了.現在,花園大学文学部教授．史学博士（中央大学）.

近世日蘭貿易史の研究

鈴木康子著　思文閣史学叢書

近世日蘭貿易における日本輸出商品の生産から販売までを複合的な視点から詳細に追究し、近世における日蘭貿易の状況と推移を明かし、日本とアジア・ヨーロッパ市場の動向を長崎貿易を接点としてとらえる。

▶A5判・480頁／定価10,080円　ISBN4-7842-1178-0

幕藩制国家の成立と対外関係

加藤榮一著　思文閣史学叢書

幕藩権力がどのような国際的環境のもとに国家支配の枠組みを形成したのかを、「公儀」幕藩権力と連合オランダ東インド会社との関係史を基軸に、国際秩序の変動や東アジアおよびヨーロッパ社会の変革の過程の中に捉え直した意欲作。

▶A5判・468頁／定価9,240円　ISBN4-7842-0954-9

漂流記録と漂流体験

倉地克直著

漂流した男たちの体験はさまざまな形で残された。本書は漂流記録の史料的価値についてひとつの試論を示す。それらの記録を通して漂流体験を再現し、漂流民の異国認識や異国交流の実態を探る。史料篇では神力丸漂流事件の典型的な記録を翻刻。

▶A5判・352頁／定価7,875円　ISBN4-7842-1225-6

戦国大名の外交と都市・流通

豊後大友氏と東アジア世界

鹿毛敏夫著　思文閣史学叢書

西日本の戦国大名のアジア外交の実態とそこに潜む意識構造について解明するとともに、政治・経済・文化的にアジア諸国と緊密な関係にあった西国大名による都市・流通政策の実態を明らかにする。

▶A5判・300頁／定価5,775円　ISBN4-7842-1286-8

鎖国時代長崎貿易史の研究

太田勝也著　思文閣史学叢書

寛永鎖国の成立期から正徳新例に至るまで、幕府の貿易政策を徹底追究。糸割符仕法・相対売買法・貨物仕法・制定高制度・銅代物替貿易・長崎会所貿易・宝永新例・正徳新例の展開を数量的考察とともに実証。随所に新見解を示す。

▶A5判・664頁／定価14,490円　ISBN4-7842-0706-6

日蘭交渉史の研究

金井　圓　著　思文閣史学叢書

三浦按針を乗せたリーフデ号の漂着から、徳川鎖国・オランダ東インド会社の解散・外国船打払令を経て、開国に至る二世紀半の対外関係史の要をなす日蘭交渉史の知られざる局面を、主として在外未刊行史料に基づき実証。

▶A5判・500頁／定価8,925円　ISBN4-7842-0446-6

瀬戸内海地域社会と織田権力

橋詰　茂　著　思文閣史学叢書

特産物の塩、周辺物資の海上輸送、在地権力の動向、海賊衆や真宗勢力の台頭、制海権をめぐる抗争など、瀬戸内海・四国をとりまく実態を明かす。

◎内容目次◎

第１編　瀬戸内海地域社会の形成と展開
瀬戸内における塩の生産／瀬戸内水運と内海産業／地域の社会階層／四国真宗教団の成立と発展
第２編　瀬戸内海社会の発展と地域権力
在地権力の港津支配／香川氏の発展と国人の動向／海賊衆の存在と転換／瀬戸内を巡る地域権力の抗争
第３編　地域権力と織田権力の抗争
石山戦争と讃岐真宗寺院／寺内町勢力との対決／寺内町の構造／織田権力の瀬戸内海制海権掌握／織豊政権の塩飽支配／戦国期地域権力の終焉

▶A5判・390頁／定価7,560円　ISBN978-4-7842-1333-7

八瀬童子（やせどうじ） 歴史と文化

宇野日出生著

最新刊

赦免地踊の燈籠着

京都の八瀬の地に平安時代より生活してきた人たちを八瀬童子という。彼らは自治組織を形成し、比叡山や天皇家と深い関わりを持ってきた。今まで非公開であった八瀬童子の関係文書の活字化に中心メンバーとして携わり、民俗についても１年間調査を行った著者が、彼らの苦難にみちた激動の歩み、そして今に伝わる思想・行動を歴史に裏付けられた「文化」としてとらえた一書。

〔内容目次〕

第１章　八瀬の不思議〈古代から現代までの時空〉
第２章　八瀬の景観〈集落の構成〉
第３章　八瀬童子会文書とは何か〈伝来の至宝〉
第４章　八瀬の宮座〈平安時代の生活〉
第５章　後醍醐天皇と八瀬童子〈伝説と史実の共存〉
第６章　童子と国名〈名誉の称号〉
第７章　諸役免除〈特権を守る〉
第８章　村の営み〈暮らしのかたち〉
第９章　延暦寺との争論〈生死をかけた闘い〉
第10章　八瀬の正史〈引き継がれた史実〉
第11章　赦免地踊〈特権の歓喜は祭礼へ〉
第12章　特別積会立から八瀬童子会へ〈さらなる特権の継続〉
第13章　輿丁〈天皇の輿を担ぐ〉
第14章　大喪と大礼〈全国の注目を集めた八瀬童子〉
第15章　歴史の証人〈八瀬童子に聞く〉
第16章　念仏講〈顕彰される歴史と人物〉
第17章　高殿の役割〈精進潔斎の日々〉
第18章　老衆たち〈祭りの最高幹部〉
第19章　伝統の継承〈祭りや行事〉
第20章　天皇と八瀬童子〈皇室との新しい関係〉

▶46判・210頁／定価1,890円　ISBN978-4-7842-1352-8

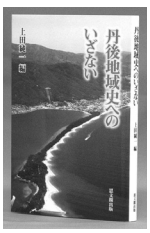
うの・ひでお…1955年滋賀県生まれ．國學院大學大学院日本史学専攻修了．現在京都市歴史資料館統括主任研究員．

丹後地域史へのいざない

上田純一（京都府立大学教授）編

最新刊

歴史を「国家」の視点からではなく、「地域」の視点から見つめ直そうという関心の高まりつつある中、古来より独自の歴史や文化が生まれ育まれてきた京都府下の丹後半島地域を総体的に解明する試み。政治・経済史的観点からだけでなく、地域住民の視点から、そして彼らの抱いていた歴史的な帰属意識や時代心理の分野にまで言及した全７篇を収録。



▶46判・184頁／定価1,680円　ISBN978-4-7842-1348-1

上賀茂のもり・やしろ・まつり

大山喬平監修／
石川登志雄・宇野日出生・地主智彦編

古文書・古記録をはじめ建築や神饌などの姿・形のなかに古い神社と失われた日本文化が受けつがれている上賀茂神社。平成18年３月に神社所蔵の約14,000点の文書が重要文化財に指定されたことを記念して、同社主催の歴史文化講座の成果をまとめ、上賀茂神社をめぐる神事・歴史・文化をわかりやすく紹介。

▶A5判・412頁／定価2,940円　ISBN4-7842-1300-7

京の鴨川と橋　その歴史と生活

門脇禎二・朝尾直弘共編

歴史都市京都のシンボル的存在である鴨川とそこに架かる橋について、平安京以前から昭和まで、各時代の様子を具体的に明らかにし、人々の暮らしの中でどのような意味を持っていたかを探る。

▶46判・292頁／定価2,310円

ISBN4-7842-1082-2

京都 高瀬川　角倉了以・素庵の遺産

石田孝喜著

歴史に埋もれた史料を検索し、高瀬川の流れとともに研究を続けてきた著者が、運河開削の歴史をたどり、舟入や橋の変遷など、多方面から歴史と文化のすがたを描く。図版多数。

▶A5判・292頁／定価2,310円

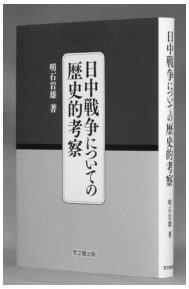
ISBN4-7842-1253-1

日中戦争についての歴史的考察

明石岩雄（奈良大学教授）著　**最新刊**

日中戦争の全面化は、太平洋戦争への決定的転換点であった。日中戦争の原因について歴史学から考察する。

【内　容】
第１部 第１次世界大戦後の日中関係
　石井・ランシング協定の前提
　新四国借款団に関する一考察
　第一次世界大戦後の中国問題と日本帝国主義
第２部 南満鉄道と日本帝国主義
　五四運動と南満鉄道
　1920年代日中関係における「大蔵外交」の展開
第３部 日中戦争
　1920年代日本軍部の対中国「二重政策」
　日中全面戦争の国際的条件
　日本軍の中国中南部侵略



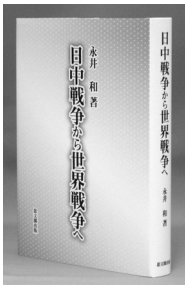
▶A5判・352頁／定価5,775円　ISBN978-4-7842-1347-4

日中戦争から世界戦争へ

永井 和著

華北に利権を求める日本。イギリス・アメリカ・ソ連を相手にしてどのような対応をしたのか。日本が世界戦争への道を歩んでゆく姿を明らかにする一書。

【内　容】
序　章　東アジア20世紀史の中の日本
第１章　日本陸軍の華北占領地統治計画について
第２章　日中戦争と日英対立
第３章　1939年の排英運動
第４章　日中戦争と帝国議会
第５章　日中戦争と陸軍慰安所の創設
補　論　江口圭一論



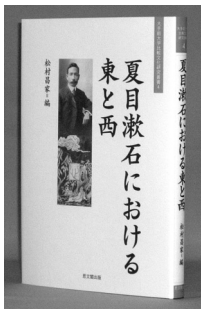
▶A5判・490頁／定価7,980円　ISBN978-4-7842-1334-4

大手前大学比較文化研究叢書

松村昌家編　**夏目漱石における東と西**　【最新刊】

明治の文豪、夏目漱石の小説において、そこに織り込まれた西洋的概念と東洋的概念の葛藤、直接影響を受けた小説との比較、イギリスの事物の受容の様相など、気鋭の研究者たちによる漱石文学論7篇。

〔内容目次〕
小説美学としての〈非人情〉―『草枕』の成り立ち―　（松村昌家）
『吾輩は猫である』におけるメランコリーと神経衰弱　（仙葉 豊）
「甲羅ノハヘタル」暗示―『心』「琴のそら音」の深層　（佐々木英昭）
奇人たちの饗宴
　―『吾輩は猫である』とT.L.ピーコックの〈談話小説〉　（飛ヶ谷美穂子）
漱石の『坑夫』とゾラの『ジェルミナール』
　―創作ノートと調査資料―　（大高順雄）
「カーライル博物館」論 ―明治期のカーライル受容を視座として　（神田祥子）
漱石の薔薇戦争　（森 道子）



▶A5判・208頁／定価2,940円　ISBN978-4-7842-1335-1

谷崎潤一郎と世紀末
松村昌家編
▶A5判・212頁／定価2,940円
ISBN4-7842-1104-7

視覚芸術の比較文化
武田恒夫／辻成史／松村昌家編
▶A5判・256頁／定価2,940円
ISBN4-7842-1187-X

ヴィクトリア朝英国と東アジア
川本皓嗣／松村昌家編
▶A5判・280頁／定価3,360円
ISBN4-7842-1297-3

書評・紹介一覧　１～２月掲載分

※（評）…書評（紹）…紹介（記）…記事〔敬称略〕

文学に見る痘瘡
（評）千葉県医師会雑誌59巻No.2（江畑魁）
（記）朝日新聞千葉地域面（著者インタビュー）2/28

東寺百合文書　第四巻
（紹）京都新聞夕刊（「洛中洛外」欄）1/5

織豊期の茶会と政治
（紹）中外日報 26973号 1/25

茶道と恋の関係史
（評）日本文学 56巻2号（No.644）（錦仁）2/10

中国近世における国家と禅宗
（評）仏教史学研究49巻2号（清水智樹）2/15

貴族院と立憲政治
（評）日本歴史（今津敏晃）2/1

続日本仏教美術史研究
（評）仏教史学研究49巻2号（村松加奈子）2/15

公家茶道の研究
（評）日本歴史705号（戸田勝久）2/1

明治維新期の政治文化
（評）日本歴史705号（友田昌宏）2/1

延慶本『平家物語』の説話と学問
（評）仏教史学研究49巻2号（坂口太郎）2/15

思文閣出版古書部

『思文閣古書資料目録』第201号

＊古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り揃えております。
＊別冊「京都特集」〔古典籍71点（写真版）、洋装本131点掲載〕も同封。

伊勢物語絵巻

ご希望の方は古書部までお問い合わせください。

〒605-0089 京都市東山区古門前通大和大路東入元町357
TEL 075-752-0005(代)　FAX 075-525-7155
e-mail kosho@shibunkaku.co.jp

思文閣美術館ご案内

命をみつめる

みぽりんの絵てがみ展

2007.6.14(木)～8.5(日)　10:00～17:00
月曜休館（祝日の場合は開館、翌火曜休館）

本展では、13歳で夭折された岡田美穂さん（愛称みぽりん）が遺した絵手紙359枚の他、写真や遺愛品を展示。命とは、生きるとは何かを見つめ直します。

【入館料】
一　般600円(500)
高大生400円(320)
小中生200円(150)
（　）内は前売・団体料金

・・＜命をみつめる関連併設展＞・・・